

日本社会学会ニュース

No.218 (2016.08.31)

1. 追悼

(1) 追悼・作田啓一先生 (1922 - 2016)

去る3月15日、作田啓一先生が亡くなられた。先生はいうまでもなく戦後日本を代表する社会学者の一人であり、学会活動に関しても『社会学評論』編集担当理事・編集長として、あるいは常務理事として貢献され、1985年から1988年にかけては会長職を勤められた。西京大学（現・京都府立大学）そして京都大学教養部で長らく教鞭をとられ、京大ご退職（1985年）後は甲南女子大学に移られ1995年3月まで勤められた。

たまたま筆者は、先生が西京大から京大に移られるのと前後して京大に入学するという幸運に恵まれ、学部学生のときから先生のご指導を受けることができた。とはいっても、先生は普通の意味での「指導」はなさらなかつたし、そういう立場にもおられなかつた。西京大でも京大でも先生は一般教育の社会学担当であったから、卒論や修論の指導に正式にタッチされることではなく、制度上正当に先生の「弟子」を名乗れる人は実はほとんどいないのである。甲南女子大時代の院生などを別にすれば、先生の弟子は、筆者をふくめて、すべて「押しかけ弟子」であり、自称の弟子であるにすぎない。

「指導」はされなかつたが、若い人の話はよく聴いてくださつた。「修論でこういうことを書きたいのですが……」などといって研究室をお訪ねすると、まずコーヒーを淹れてくださる。それからソファーにもたれて、ゆっくりと話を聴いてくださる。こちらの話が終わると、穏やかに二、三の短い質問やコメントをされる。いってみれば、それだけのことなのだが、それだけで十分に励まされ、エンパワーされる効果があつた。これはおそらく、「弟子」たちの誰もがそれぞれに体験していることだと思う。ときには「ゆうべ遅く吉田くんが電話してきてね、三時間近く話しましたよ」とおっしゃることもあった。「話しました」とはいっても、ほとんどの時間、吉田（民人）さんが一方的に話していた

ことはまず間違いないであろう。

ちょうど筆者が修論について話を聴いていただいた頃、先生の「恥の文化再考」が『思想の科学』誌に発表された。中間集団論や準拠集団論の知見を活用しながら、ベネディクトが強調した「恥」とは異なる「羞恥」の意味に注目した鮮やかな論考である。当時の作田先生は、パーソンズ理論の最も早い時期の紹介者の一人として知られていたが、同時にデュルケム、ジンメル、パーソンズ、マートンらの概念枠組みを巧みに用いて身近な日本の現実を分析するようなお仕事も多く、筆者などはむしろその方向に魅力を感じていた。「恥の文化再考」はその一例だが、同時に太宰治の愛読者でなければこれは書けない、という点でも印象深い論考であった。実際、文学や芸術についての深い素養を生かしながら、社会学と文学、論文とエッセイといった通念的な区別や境界を樂々と超えて往来されるスタイルは、いかにも先生ならではのもので、先生の著作全般にわたる顕著な特色ともなっている。

それは、アカデミックな領域での先生の代表作と目される『価値の社会学』（岩波書店、1972）を見ても明らかである。もっとも、先生は本書が「代表作」といわれることを好まれなかつた。さらに先へ進もうとしておられたからであろう。その成果の一つが1980年に出版された『ジャン・ジャック・ルソー 市民と個人』（人文書院）であり、もし先生のお仕事を前期と後期とに分けるとしたら、本書が転換点といえるのではないかと思う。

ルソーの「イデオロギーとパーソナリティの連関」を扱った本書のなかで、「防衛」志向、「超越」志向、「浸透（溶解）」志向という「行為を尊く三基準」が定式化された。前の二つは、ウェーバーの「目的合理性」と「価値合理性」にほぼ対応するが、最後の一つは先生独自の概念であり、これをさらに展開することで、日々の「特定のものごとについての経験」とは異なる「生きていること」自体の経験（「溶解体験」）が注目され、そのような経験から出発す

る社会学・人間学が構想されるにいたる（『生成の社会学をめざして』有斐閣、1993）。甲南女子大ご退職後も先生はこの方向で読書と思索を続けられ、その成果を同人誌『Becoming』に執筆された。

もとより先生は、社会生活上の諸経験に基づくオーソドックスな社会学（先生のいわゆる「定着の社会学」）を一概に否定されたわけではない。先生のお仕事は両面にわたっており、その影響は両面にわたって今後とも持続するであろう。けれども、あの温容に接すること、そしてあれこれと話をきいていただくことは、もはやできない。

（井上 俊・大阪大学名誉教授）

想い出す一二のことなど

——作田啓一先生を偲ぶ——

井上俊

作田先生が西京大（現在の京都府立大）から京大教養部に移られたのは一九五九年である。一九五八年入学の私は教養部所属の二回生だった（当時は一年間の教養課程を経てから各学部の専門課程に進むという制度）。しかし、一回生のときすでに教養科目「社会学」の単位はとっていたので、新任の作田助教授の「社会学」を改めて受講することはなかった。先生の科目をどうやになつたのは、専門課程（文学部社会学専攻）に進んでから、先生が学内非常勤講師として文学部で担当しておられた社会学仏書講読（テキストはデュルケム）が最初だつたと思う。先生は教養部所属で一般教育担当であつたから、文学部の卒論や修論の指導に関与されることはないなかつた。だから、制度上、私は作田先生の「弟子」とはいえないのだけれど、私の恣意的感覚からいえば、先生はやはり私にとつてかけがえのない「師匠」である。

にも品位・品格というものがある。先生によれば「勝負ことは結果がすべてというのではなくて、だからといって、何が何でも勝てばよいというわけではないでしょう？」。

とにかく「雀品」のよくない相手を先生は好まれなかつた。それは倫理的な基準というよりむしろ美的な基準であつた。そしてまた、単に麻雀に限らず、先生の生き方そのものにかかるような基準でもあつたと思われる。

毎週のように麻雀をしていた頃から一〇年以上経つて、一九七七年の秋、当時アメリカの大学に滞在していた私に先生がくださった手紙に、「今年の夏休みには、しばらく離れていた麻雀界に復帰しました」とあつた。主として教養部の同僚の先生方を相手に、「決断力と粘着力（すぐには降りない工夫）を養うことを心かけました」とのこと。この年の春、先生は教養部長の職に就かれた。そこで「管理職」というポストに必要なこの二つの能力を「麻雀界への復帰」によって磨こうとしたのだが、その甲斐もなく……、と手紙は続くが、もども「召集係り」の私としては、教養部の先生方の「雀品」はどうだったのか、それがます気になつたのであつた。

二 社会学のこと

もともと私は大学院志望ではなかつた。適当に卒業してマスコミ関係にでも就職しようと考えていたので、社会学関係の開講科目は必要な範囲でとつていしたもの、社会学そのも

ここでは「ソシオロジ」が個人誌であることに甘えて、一二三の個人的な想い出を記すことにしてみたい。

一 勝負のこと

先生は勝負ことが好きだつた。とりわけ、麻雀と将棋を好まれた。私が学生・院生の頃、つまり先生が三十代の終わりから四十年代のはじめの頃、少なくとも年に一度くらいは対戦していただと思う。記憶は残していないが、おそらく将棋では先生が少し勝ち越し、麻雀ではトントンか、私がいくらか勝ち越しであろう。どちらか好敵手であった。

麻雀のメンバーは多彩だつた。私のような学生や院生、仲村洋一さんや小国三平さんら社会学専攻関係者（私にとっては先輩）、多田道太郎さんや橋本幡雄さんらの人文研グループ、新聞や雑誌の記者・編集者などなど。麻雀は四人の遊びだから、ときにはうまく面子がそろわないこともあります。私が召集係りを仰せつかることもあつた。しかしうやら、召集可能な人なら誰でもよい、というわけでもないらしかつた。できればその人は避けたい、という先生なりの暗黙の基準があるらしいのだ。

たとえば、安上がりを続けて何が何でも勝とうとする人。もちろん、そういう打ち方もルールに反するわけではないから、決して不正ではない。だが、先生の基準では、それは「雀品がよくない」のである。麻雀の勝ち方（あるいは負け方

の）についてはほとんどまともに勉強したことがなかつた。卒論のテーマも「映画の社会学」としたので、映画関係の本ばかり読んでいた。ところが、肝心の卒業試験で必修科目の試験を受け損い（一夜漬けで朝まで勉強してて寝過ごした）、単位が足りなくなつて留年することになつた。親の経済的負担を軽減すべく家庭教師のバイトを増やしたりしたが、それでも結構ヒマができたので、せつから社会学を勉強してみようかと思い立つて作田先生に相談した。一九六二年の初夏の頃だつたと思う。

「社会学とはどういうものなのか知りたいので何かよい入門書を教えてください」とお願いすると、「ちょうど日本社会学会がつくった入門書『現代社会学入門』（有斐閣）が出たところだから、それを読むのも悪くはないけど、むしろウエバーの『プロ倫』、デュルケムの『宗教生活』、マートンの『社会理論と社会構造』を読んでみなさい。それで、社会学はどういうものかわかります」というのが先生の答えであつた。デュルケムの『自杀論』も読むべきだが、翻訳が古いので、できれば原書で、とも付言された（もちろん宮島義さんの翻訳はまだなかつた）。さらに余力があれば、パーソンズの『Essays in Sociological Theory』も読んでごらん、とのことであつた。

夏中かかつてこれらの本を拾い読みした結果、社会学もなかなか面白いと私は思うようになり、翌年は大学院を受ける

ことになるのだが、それはともかく、この三冊か四冊で社会学はわかりますという初学者への回答の中に、先生の「社会科学論」が示されていることもたしかであろう。それは、社会科学という学問のいわば廟所を押さえたアドバイスであつた。だが一方で、そういうオーソドックスな社会学の体系に、先生が必ずしも満足しておられないことを感じられた。そのことは、ほぼ二〇年後に刊行された『生成の社会学をめざして』(有斐閣、一九九三年)の「まえがき」のなかで、次のように述べられている。「これまでの社会学の理論体系は……『生きていること』自体の経験を大事にしている人々にどうては、自分たちに無縁の体系、空々しい体系と見えたのである。私もそのような人々の中の一人であつて、長年のあいだ空疎な体系からの離脱を模索してきた。」

事実、私が学生・院生の頃から、先生は社会学へのそうした違和感をときおり口にされた。当時は「社会学の外へ出る」という言い方をよくされた(この言い方はマルクス主義社会学系の人たちも使ってはいたが、先生の言われる意味とは少し違つていただろう)。大学院に入つて間もない頃だろうか、あるとき先生と話していて、ついうっかりと「やはり外へ出ないダメですね」とか何とか安易な相槌を打つと、先生はさもおかしそうに「君はまだ入つてもいいのに、どうやつて外に出るんですか?」——これには参つた。そこには皮肉や揶揄のニュアンスはなく、単に事実の陳述という感じで、

それはまさにその通りであつたから、一人で大笑いしたことを憶えている。

またあるとき、ほぼ同じ頃だったと思うが、某先生の論文について話したことがあつた。それは、これまでの行為理論を整理しながら後の展望を述べた長い論文で、私にとつてたいへん有益なものに思われた。公表されて間もない論文であつたが、先生はすでに読んでおられ、私の高い評価に対して、「そうですね。もしもそれが一〇年前に発表されていたら素晴らしい論文だったでしょうね」と言われた。このときも、皮肉や揶揄ではなく、事実を事実として淡々と述べるという感じであった。先生の専門家としての基盤からすれば、どうどしか言いようがなかつたのであろう。もつとも、「でもこれから勉強する人には役に立つ論文ですね」と、すぐに著者(某先生)と初学の読者(私)とをオロロしてくださいさつたのだつたが。

二 映画と文章作法のこと

文学はもちろんだが、先生は映画もお好きで、よく見ておられた。新しいものだけでなく、当時は名画座などでもなかなか見られなかつたような、一九三〇年代フランスの古典的作品(ルネ・クレール、ジャック・フェデー、ジャン・ルノワール、ジュリアン・デュヴィヴィエらの最盛期の諸作品)などもたいてい見ておられた。

同じく映画好きだった隣生の高橋三郎さんと二人で、手作りの映画評論同人誌をつくることになつたのは、一九六一年、私が留年中のときである。押入れを捜してたしかめてみると、創刊号は一九六一年六月七日発行である。先生は「フィルムの思い出(1)」として、フェデーの「外人部隊」(一九三三年)について書いておられる。私はジユールズ・ダッサンの「日曜はダメよ」(一九六〇年)について書いた。高橋さんのものは、同じダッサンの「裸の町」(一九四八年)の有名なラスト・シーンなどにふれながら、今後「追うものと追われるもの」とについて連載をするという宣言であつた。

続く第二号には私はジョン・フォード「黄色いリボン」の評を書いたが、これを先生がほめてくださつた。「前回は言わずもがなの部分がありましたが、今回はいいですね」。麻雀や将棋以外ではじめて先生にほめていただいたうれしかつたが、タネを明かせば、今回は創刊号の先生の「外人部隊」評を真似して書いたのである。

「外人部隊」の主人公ピートルは愛人フローランスに翻弄されて大金を横領し、パリを退散され、アルジェリアで外人部隊に身を投じるが、そこで「フローランスの裏返しであるところのイルマに遭遇する。フローランスこそじつはイルマの裏返しであつたのに。彼には表と裏とが逆になつてしまつた。こういう人間にどうては、人生はえそらごとのようにしか見えないのである」。だから、「ロゼーおばさんのトランプの運

命占い」も「分かりのよくない顧客」にピートルの死を告知するためだけのエピソードではない。「虚構の虚構性をトランプ占いで象徴することによって、人生をえそらごとのように生きようとしたピートルの実在性を作者は主張したかったのだ」。

無駄のない文章である。「言わずもがなの部分」もない。こういう文章を書きたいと思い、その文体をひたすら模倣したのだから、多少とも先生のお気に召すような文章になつたのであろう。いずれにせよ「言わずもがなることは書かない」というのは先生の文章作法の一つのポイントであつた。

もう一つ、文章作法に関する先生の発言で印象に残つているものがある。「文章を書いていて、ここは重要な、ここはアピールしたいといふところにさしかかると、どうしても肩に力が入つて、絶叫調になつたり説教調になつたり、ともかく文章が悪くなるから、そういうときこそ肩の力を抜いて、できるだけさりげない表現で書けるように心がけること」というのだ。これもまた、先生の文章作法の大手なポイントであつたと思う。

もちろん実際には、言わずもがなることは言わず、重要なことはさりげなく述べながら、読者にわかりやすい良質な文章を書くということは、きわめてむずかしいことだ。無駄のなさとわかりやすさは必ずしも両立しない。作田先生もそのへんは十分に自覚しておられて、自分はどうも「くりかえ

し」や「いいかえ」(同じ命題を別の表現でくりかえすこと)が苦手で、そのほうが明らかにわかりやすくなると思われるような場合でも、なかなかそれができない、と言つておられた。また、自分の文章には余裕や遊びが乏しく、読者には「やや息苦しいかもしれない」とも。しかし、だからといって、それを改善しなければ、というふうでもなかつた。文体といふのはおそらく、ほどんど意識することなくからだが反応する「身体技法」のようなものなのだろう。だから簡単には「改善」できないし、また人それぞれのこだわりに応じて多様であつてよい、と先生は考えておられたと思う。実際、自分の書いた文章に先生の基準を厳格に適用して「言わすもがなことばかりだなあ」などと反省はじめたら、何も書けなくなつてしまつに決まつている。

では、先生本人はご自分の文章のなかでどれがよいと思つておられたのだろうか。先生の最初の論集『恵の文化再考』(筑摩書房、一九六七年)が出版されて間もない頃、何かの折に、「内容は一応おくとして、文章としてはよいのはどれですか?」と單刀直入に尋ねてみたことがある。「そんなこと自分ではわからないよ」と迷げ腰なので、やはり「恵の文化再考」初出『思想の科学』(一九六四年四月号)ですか、と重ねて追及するど、「どうかなあ、自分ではむしろ『死との和解』(初出『展望』一九六四年二月号)のほうが文章としてはうまく書けたかなと思うけれど……」という自己評価だつた。

四 トーリングの本のこと

先生どこ一緒にした仕事のなかでは、やはり『命題コレクション社会学』(筑摩書房、一九八六年、文庫版、二〇一二年)が印象深い。一九八四年のはじめ頃、この本をつくるために、先生を中心に二〇人ほどの研究会をまずつくつた。出版された本のどこにも記されていないけれども、研究会コアメンバーの何人かの間では、これを先生のご退職記念の本にしようという暗黙の了解があつた。命題で構成された本をつくるうどいうのもどもと作田先生のアイディアであり、月に一回ほど開かれた研究会もたいへんうまくいつたのだが、出版が近づいてタイトルを決める段になつて、先生は「コレクション」という言葉に難色を示された。単に集めただけではない、というのである。しかし「弟子」たちは、お気持ちはわかるが、これぞといった代案もないし、「コレクションも、あつさりとした感じでなかなか今風でいいですよ」などと、結局、なお穏然としない様子の「師匠」を押し切つてしまつた。

一九八五年の春、先生は二年間にわたつて在職された京大教養部を定年退職され、甲南女子大に移られた。そして同年秋には日本社会学会会長の職に就かれた。私も勤務先の大坂大学の仕事などが何かと忙しくなり、特段の用事もなしに先生にお会いする機会はだんだん減つていつた。何よりも、ふらりとお訪ねできる京大の研究室がなくなつてしまつたこ

とが大きかつた。それでも、甲南女子大から帰られる途中、四条河原町近辺の喫茶店、たとえば「フランソワ」などでお会いして雑談する機会はときおりあつた。昔のことを懐かしくうに話されることもあるたが、そこに帰りたいという感じではまったくなかつた。むしろ、絶えず先へ進もうとする意欲を感じられた。甲南女子大の大学院の講義で、社会学の新しい方向性を模索していることなどを、楽しそうに、そして肩の力を抜いて「さりげなく」話されることも多かつた。前記の『生成の社会学をめざして』は、その講義をもとに書かれている。

一九九五年に先生は甲南女子大を退職された(さうにしばらく非常勤講師を勤められたが、一九九七年に退かれた)。しかし、その後もオソドックスな「定着」の社会学に対する「生成」の社会学・人間学という「新しい方向」に沿つて読書と思索を続けられ、その成果を同人誌『Becoming』に発表された。その一部は『生の欲動——神経症から倒錯へ』(みすず書房、一〇〇三年)や『現実界の探偵——文学と犯罪』(白水社、一〇一一年)として出版されている。先生はまた、知る人ぞ知る「激高老人のぶろぐ」(主として一〇〇七年一〇月まで)などによつて、一般社会への発言も続けられた。

私は一九九六年に阪大から京大へ、そして一〇〇一年に甲南女子大に移つた。しかしもちろん、京大にも甲南女子大にも、もはや作田研究室はなかつた。けれども、一〇〇九年に

私が甲南女子大を退職してしばらくすると、先生はハガキをくださり、「いくらか時間ができたでしょうから」と、龜山佳明さんや岡崎宏樹さんらと以前から続けてこられた研究会に誘つてくださつたので、再び先生とほぼ定期的にお会いする機会ができた。半世紀前、学生・院生のときは、文学部や教育学部で先生が学内非常勤講師として担当された仏書講読や演習に週に一度出席していたが、今回はだいたい一か月に一度である。

こうして五年ほどが経つたある日、研究会のあとで「トーリングの Sincerity and Authenticity が手許にあつたらちょうど貸してくれませんか?」と先生がおつしゃつたので、「いいですよ、お送りしましょうか?」とお尋ねすると、「いやいや、それほど急いでないから、次のとき持つてきてもらえばいいよ」とのことだつた。そういうは昔、先生や富永茂樹さんらが中心の「文学社会学研究会」でトーリングについて報告したことがあつたなあと思いながら、帰宅後さつそくその本を搜し出して、いつでも持参できるように手近な木棚に移しておいたのだが、間もなく先生は入院されてしまい、お渡しする「次のとき」はついになかつた。その本は今も、机のすぐ横の木棚の右端に立てられたままになつてゐる。

じのうえ しゅん・大阪大学名誉教授